

佳作

ひまわり学級

埼玉県立伊奈学園中学校 3年

小此木 奏乃

私の通っていた小学校には、「ひまわり学級」という障害をもった子が集まった学級があった。当時の私には誰がどんな障害をもっているのかなんて分からなかった。ただ、他の子と少し違って一緒にずっといるのは難しいからひまわり学級にいるぐらいに思っていた。私は、このひまわり学級との思い出がずっと心に残っている。

私が小学三年生の頃、クラスにひまわり学級の子がいた。どうにか仲良くなりたくて、二時間目と三時間目の間の休み時間によくひまわり学級の教室に友達数人と遊びに行っていた。縄とびをしたり、花いちもんめをやったり、ほとんど私と友達と先生の声しか教室には響かなかったけれど、とても楽しかった。質問をしても答えが返ってくるわけではないし、私達が遊びに教室に来て良かったのかも分からない。それでも、いつか口を開いてくれると信じて来る日も来る日もひまわり学級に通い続けた。私にひまわり学級の先生がかけてくれた言葉を今でも覚えている。

「みんなが来てくれるおかげでひまわり学級のみんながすごく楽しそうにしてるの。いつも来てくれてありがとう。」

私はこの言葉で目の前が明るくなったような気がした。自分達がしてきたことは間違っていなかったんだと感ずることができた。その後も少しずつ遊びに参加してくれる子が増え、いつのまにか自分の中でその時間がとても楽しみになっていた。その時間だけは、障害の有無関係なくかかわることができたからだ。今でもどう接するのが正解なのかよく分からない。障害者だからある程度、特別扱いした方が良いのか、一般の人と変わらない接し方をした方が良いのか。

でも、この経験から学んだことがある。それは、障害の有無関係なく、大前提全員一人の人間であることだ。障害者というのは、ただその人の個性である。また、目に見えるものが全てではないということも学んだ。見た目は私達と変わらなくても、障害をもっている人も多くいる。人を見た目だけで判断してはならないということも学んだ。

私の通う中学校には、ひまわり学級のように障害者が集まる学級はないし、クラスにそういう子がいる訳でもない。障害をもつ人と交流のできる機会は少なくなってしまったが、小学生の時に学んだことをこれから活かしていきたい。また、私は毎年小学生と関わるのできるボランティアに参加している。そこで時々、障害をもつ子と関わることもある。そんな時、自分が学んできたことを活かして、どうすれば楽しく活動できるのかを考えていきたい。